

研究ノート

マルクス恐慌論研究序説（後編）

——マルクスとリカード、シスモンディ
ならびにＪ・ミルの恐慌把握の検討——

高 橋 順 三 郎

目次

まえがき

第一章 ブルジョア経済学者の恐慌観

第一節 リカードの恐慌観

第二節 シスモンディの恐慌把握

第三節 Ｊ・ミルの恐慌観……………（以上、第二十八巻第二号所載）

第二章 マルクスの恐慌把握

第一節 唯物史観の「公式」と恐慌

第二節 経済学の「区分」と恐慌

第三節 産業循環と労働者階級

マルクス恐慌論研究序説（後編）

簡単な総括……………（以上、本号所載）

第二章 マルクスの恐慌把握

前章においては、マルクスに先行するブルジョア経済学者たちが過剰生産あるいは恐慌をどのように把握しているかを簡単に検討したのであり、彼等は、この経済現象を正しく資本主義的生産の本質から説明することはとうていなしえず、恐慌が資本主義的生産の発展にとっていかなる意味をもっているのであるか、すなわち、恐慌のもつ歴史的な意義については、これを

把握することは不可能なことであった。一七六〇年代にはじまったイギリスの産業革命は、イギリス資本主義の急速な発展をもたらし、一八二五年にはすでに過剰生産による恐慌をひき起し、これ以降周期的に、イギリスはこの経済恐慌に襲われることになる。D・リカードやJ・ミルによる過剰生産否定は、この現実の歴史的事実によって破産せしめられたのである。マルクスによる経済学研究あるいは恐慌研究は、このような歴史的前提をもつものである。

われわれは、まず、マルクスの経済学研究にとっての「導きの糸」といわれるいわゆる唯物史観の「公式」において、恐慌の問題がどのようにとりあつかわれているかを検討してみることしよう。

第一節 唯物史観の「公式」と恐慌

『経済学批判』の「序言」に述べられているこの「公式」は、われわれの当面の問題において、決定的に重要な文章であるので、煩をいとわず関連箇所をすべて引用することにしよう。

「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律的

および政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでの内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激にくつがえる。このような諸変革の考察にあたつては、経済的生産諸条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革と、それで人間がこの衝突を意識するようになり、これとたたかつて決着をつけるところの法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー諸形態とをつねに区別しなければならない。ある個人がなんであるかをその個人が自分自身をなんと考えているかによって判断しないのと同様に、このような変革の時期をその時期の意識から判断することはできないのであつて、むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない。一つの社会構成は、それが生産諸力にと

って十分の余地をもち、この生産諸力がすべて発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されてしまうまでは、けっして古いものにとつて代わることはない。それだから、人間はつねに、自分が解決する課題だけを自分に提起する。なぜならば、もっと詳しく考察してみると、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生することが、つねに見られるであらうからだ」(全集、第十三巻、八一九頁、邦訳、大月版、六一七頁)。

みられるように、マルクスは、人間社会の発展法則をきわめて簡潔に提示している。彼は、人間社会の歴史的発展の原動力を「物質的生产諸力」に求め、人間は必ずこの「物質的生产諸力」の高さに対応した「生産諸関係」を結ばざるをえないことと、「生産諸力」はこの対応した「生産諸関係」のもとで必然的に高まること、だがしかし、この「生産諸力」の高まりは今までそれに対応しその発展に上昇を促進していた「生産諸関係」と必然的に「衝突」せざるをえないこと、この衝突は「社会革命の時期」の「はじまり」であること、さらに、こういった「経済的基礎」の変化は「上部構造」の「変革」をもたらすこと、かかる社会の発展法則を一般的に、すなわち、人間社会の歴史的発展に一般的に妥当する法則として、換言すれば、社会の一般的発展法則として、提示しているのである。さらに注

意しなければならぬ重要なことは、マルクスが、このような「変革」に際し「経済的生产諸条件」における物質的な・それ故人間の意思から独立した変革、いいかえれば「経済的基礎」における変革と、人間がこの「経済的基礎」の変革を意識し、この「基礎」の変革をさらに押しすすめるための、したがって又、それ自身をも変革すべき「上部構造」における変革とを、明確に区別して把握しているということである。総じて「経済法則」は、一定の「生産関係」のもとで、この「生産関係」に規定されて、必然的に、すなわち、人間の意思から独立しておのれを貫徹させるものであり、人間の願望や善意とは無関係に、あたかも「家が頭上にくずれ落ちるばあいの重力の法則」(『資本論』第一巻、八二頁、長谷部訳、青木書店版(1)、一七六頁)のように、自己を主張するものである。この必然的に貫徹する法則に対して、人間は、これを変更したり消滅させたりすることはできず、この法則を認識し、これを自己のために利用しうるのみである。マルクスが、「生産諸力」の高まりが今までこの高まりを促進していた「生産諸関係」と必然的に衝突せざるをえなくなると述べるとき、この衝突は当然、必然的な法則として貫かざるをえないものとしてとらえられているのである。

さて、以上の説明は、マルクスによって「一般的結論」として述べられた人間社会の歴史的発展にとつての一般的発展法則ともいふべきものであるが、われわれは、この一般的発展法則をわれわれの考察対象たる資本主義社会にあてはめて考察して

みなければならぬ。資本主義社会において、この「一般的結論」がいかなる形態で貫徹しているか、「生産諸力」と「生産諸関係」との対立矛盾がいかに発展・深化・拡大しているか、を研究しなければならず、又、「経済的生产諸条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革」とは一体どのようなものをさすものであるか、を検討してみなければならぬ。それでは、この「自然科学的に正確に確認できる変革」、そして「社会革命の時期」の「はじまり」たるべきものは、資本主義社会においてはどのようなことをさすのであろうか。いうまでもなく、この「変革」は、マルクスの時代においては、「過剰生産恐慌」を意味するものである。資本主義社会においては、生産力は機械制大工業による大量生産として、又、工場内における計画的生産として、すなわち、「社会的生産」として、飛躍的に増大するが、この大量生産された商品はすべて各資本家の「私的資本主義的領有」に帰すべきものである。つまり、この社会においては、「生産諸力」と「生産諸関係」との対立矛盾は、「社会的生産」と「私的資本主義的領有」との対立矛盾となつてあらわれるのであり、この対立矛盾によつてはじめて資本主義は資本主義として維持され発展させられるのであり、又、この矛盾が爆発となつて顕在化したものが過剰生産恐慌なのである。したがつて、以上の点から、われわれはきわめて重要ないくつかの結論をひき出すことができる。

第一に、マルクスは、過剰生産恐慌を「経済的生产諸条件に

おける物質的な変革」としてきわめて重視していたのであるが、それは、この「変革」が「社会的生産諸力」と「生産諸関係」との間の矛盾の爆発を意味するものだからであり、したがつて、資本主義社会の発展という観点において恐慌が決定的な意味をもつものである、という判断からにはかならない。さらにいえば、過剰生産恐慌は、資本主義社会における「社会革命の時期のはじまり」としてマルクスに重視されていた、ということである。この「社会革命の時期のはじまり」たる過剰生産恐慌を生み出す資本主義社会の経済法則を「一般的結論」の適用として解明すること、いいかえれば、「一般的結論」が資本主義社会においていかなる形態において貫徹しているか、「生産諸力」と「生産諸関係」との対立矛盾がいかに発展・深化・拡大しているか、そして、この矛盾がいかに必然的に過剰生産恐慌として爆発せざるをえないか、これらの解明こそ、マルクスが自己に課した使命であつたということができるのである。そしてこのことは又、見方をかえていうならば、「近代的社会の経済的運動法則の暴露」(das ökonomische Bewegungsgesetz der modernen Gesellschaft zu enthüllen)こそ彼にとつての最大の課題であつた、ということでもある。『資本論』の最後の窮極目的「(der letzte Endzweck dieses Werks) たるこの命題は、周知のように、「ブルジョア社会」の「生成・発展・消滅」交替」の必然性の暴露たる意味をもつものであるが、この必然性の暴露は、右にみたように、過剰生産恐慌の解明と密接

に結びついていた、というよりも、ヨリ厳密にいうならば、過剰生産恐慌の必然たることの解明によつてはじめて「ブルジョア社会」の「生成・発展・消滅」交替の必然性が暴露される、というべきものである。

注8、したがって明らかに、恐慌の研究は、産業循環における恐慌局面のみを取りあつかうのではなく、それにいたる必然的な過程たる循環運動としてとらえることによつてのみ、十分な広がりと内容においてとらえることができるのである。

第二に、マルクスは、資本主義社会における「生産諸力」と「生産諸関係」との間の矛盾の爆発＝衝突したがって恐慌を、「自然科学的に正確に確認できる変革」(naturwissenschaftlich *treu zu konstatierenden Umwälzung*)ととらえているといふことである。同じような主張は他の箇所においてもみることができ。たとえば、一八五八年十月四日付の『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』への寄稿文「イギリスの商業と金融」において次のように述べている。

「われわれは、ひとり最近のこの議会報告書ばかりでなく、『一八四七年の商業的窮境についての報告書』にも、またそれ以前の同種のその他すべての報告書にもつうじる本質的な欠陥は、次の点にあると考える。——これらの報告書は、新たな恐慌を、そのたびに、社会の地平線にはじめて現われてきた孤立した現象、したがって、このまえの逆転とこんどの逆転との中間の、たつたいま経過してきた一時期だけに

マルクス恐慌論研究序説(後編)

特有な、ないし特有であると想定されている出来事、動き、作用因によつて説明されるべき現象として、取り扱っていることである。もし自然科学者たちがこれと同じ子供じみた方法で事を扱ったとしたら、彗星くらしいものが再出現しても、世間は驚天動地ということになるであらう。世界市場の恐慌を支配している法則をあばきだそうと試みる場合には、それらの恐慌の周期的性格ばかりでなく、その周期性の正確な日取りをも明らかにしなければならない。かつまた、それぞれの新たな商業恐慌に特有な、他と区別される諸特徴によつて、これらの恐慌のすべてに共通な面がおおいかくされてはならない」(全集、第十二巻、五七一頁、邦訳、大月版、五四三頁、傍点——高橋)。

このように、マルクスは、過剰生産恐慌を「自然科学的に正確に確認できる変革」といい、「その周期性の正確な日取り」(die genauen Daten dieser periodischen Wiederkehr)をも明らかにしうるもの、といっている。勿論、これらのことから、恐慌は誰によつてもとらえられるものであるとか、その「周期性」も簡単に認識しうるものであるとかいった結論を下すことはできない。恐慌は「資本主義的生産の最も複雑な現象」(das verwickelteste Phänomen der kapitalistischen Produktion、『学説史』全集、第二六巻、第二分冊、五〇二頁、大月版、六七七頁)たるものであり、これの解明はきわめて困難な作業である。とはいふものの、資本主義的生産における「生産

「諸力」と「生産諸関係」との対抗^{II}矛盾、換言すれば、「社会的生産」と「私的^{II}資本主義的領有」という資本主義的生産の基本的矛盾の發展が、他の諸関連との結びつきにおいて正しくとらえられるならば、この基本的矛盾の爆發の必然性は、したがってその「周期性」も、まさに「自然科学的に」正確な把握をなしうるものということができるのである。そしてこの点にこそ、リカード以降恐慌を單なる偶然的出来事として説明してしまう經濟學者達に対するマルクスの強い批判の一矢がある。彼等は、過剰生産恐慌を偶然的なもの、つまり、外的諸条件によって左右される一時的偶然的な混乱にすぎないもの、としてとらえていたのであるが、マルクスはこれを資本主義的生産の本質と結びつけ、「生産諸力」の増大の結果必然的に生み出されざるをえない衝突として、したがって又、資本主義的生産のもとではとうてい避けることのできない資本主義的生産それ自身の矛盾の爆發として、とらえていたのである。さらに又彼は、この矛盾は恐慌となつて爆發することによって一時的に解決しうるとはいうものの、資本主義的生産の發展は再びまたこの爆發を生み出さざるをえないこと、それ故、運動は必然的に周期性をおびること、として把握しているのである。

注9、ここでの「恐慌の周期性の正確な日取り」ということは、一見そう思われがちなような「恐慌の勃発の正確な日時」というような意味あいのものでありえないであらう。この点について、三宅義夫教授は次の如くのべておられる。「右の『週期性の正確な日取り』

というのはどういう語の訳か原文を見ていないので明らかでないが(この大月書店刊『選集』第九卷(上)の『トリビュン』論説の訳はいずれもロシア語訳によっているはずであるが、このロシア語訳も未見)、意味はおそらく週期の正確な進行プロセスといったほどの意味であらう」(論文「一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解」、『立教經濟学研究』、第十卷、第二号、一八一—九頁)。

第三に、恐慌による矛盾の爆發はブルジョア的生産の發展の特定の段階をさししめすものであり、資本主義的生産關係のもとでの生産力の發展がこの生産關係をすでに極端となすにいたつたことのあらわれであり、換言すれば、資本主義的生産の成熟さらには爛熟をも示す一つのいわば指標としての意義をもつものである。それ故、人類史の發展という観点においては、この恐慌によるブルジョア社会の震撼はすぐれて進歩的な現象とみなされることになるわけである。このことはまた、シスモンディに代表される經濟學者に対する批判となる。恐慌による労働者の失業と貧困、資本家の破産と没落、社会の混乱と富の荒廢、これらの悲惨な歴史的現実に直面した彼等は、ここに資本主義的生産の爛熟とその歴史的過渡的性格をみることなく、したがって、この恐慌のもつ歴史的意義を到底理解しえず、シスモンディにみたように、ただただこの「悲しむべき」現実にとまどうのみで、生産を消費と均衡させるべく歴史の車輪を逆転させ中世に逃避してしまうのであるが、このことは、彼等の視

野のブルジョア的（正確にはプチブルジョア的）限界を示してあまりあるものであり、彼等の「理論」の反動性を知らうるわけであるが、同時にわれわれは、彼等に対してマルクスとともに「歴史的必然についての愁歎が何の役に立とうか？」（『資本論』第一巻、六二五頁、長谷部訳、青木書店版②、九二六頁）と批判しなければならぬのである。^{注10}

注10、一九七〇年代いわゆる「高度経済成長」の矛盾が社会のあらゆる面に顕在化してきた日本資本主義において、さまざまな色合いを帯びたシスモンディ主義者がなんと数多く出現したことであろうか。一例をあげよう。たとえば一九七四年八月三一日付朝日新聞夕刊の京都大学助教授吉田光邦氏の論文「人間の都市と物量の都市」をみよう。「日本の都市はいまもむざむざな様相を呈しはじめている。」という文章ではじまるこの論文は、日本という現実の資本主義社会における生産関係Ⅱ階級関係を完全に無視（あるいはヨリ正確には没却）した典型的シスモンディ主義者の慟哭のエレジーである。かつて「都市民が安定した個人の居住性と定着性をもっていた時代、それらの空間（都市民を収容する空間）——高橋」はいつも人間に対応したサイズをもつてデザインされ」ていたが、「現代都市のデザインは、人間を巨大な集団としてとらえ、巨大な流れとしてとらえ、それをいかに能率的に処理し、管理するかをもつてデザインされる」のだという。又、「かつての都市は人間が集まり、たがいに情報と物を交換するための場所であった」が、「今日の都市は機械を中心とした管理組織が、きわめて濃い密度で集積した空間となっている」のであり、「よくいわれる人間—機械系、すなわ

マルクス恐慌論研究序説（後編）

ち人間と機械の共存生活が、最も濃密に展開されるセンター」であるという。かかる「荒廃した都市」のもとで人々は「人間の間尺に適合した空間と時間を求めて」「遊牧化」せざるをえないというわけである。資本主義社会においては、一切を支配する経済力は資本である。この資本による生産力の高まりの結果生み出される資本主義的生産関係との対立・矛盾の激化こそ資本主義社会におけるすべての動揺・混乱・荒廃等の唯一の根源として把握されねばならない。したがって、この社会における動揺・混乱・荒廃等の現象は、そこに資本主義社会の成熟と同時に爛熟が示されていること、同時に、新しい社会実現の諸条件がこの社会において着々と形作られつつあること、それ故、「歴史的必然についての愁歎」ではなく「歴史的必然についての科学的認識」をますますわれわれに急務たらしめていること、かかることをわれわれはこれらの現象を通して把握しなければならないのである。しかるに、この際、階級的観点したがつて科学的観点の一切を放擲し、ただだんに「組織一般」「機械」一般をいくら議論したところで問題の解決にとって一歩も前進したことにはならない。したがって、かかる議論の末にこの「都市の荒廃」を救うべく論者によって引き出される結論はまさに噴飯ものである。いわく、「では人間のための都市と、物と量のための都市と、この両極端に位置する都市の像は、どんな哲学をもつて結合することができるのか。それはマクロな物と量の都市（？）のなかに、できる限りミクロな二次的な都市（？）を生み出すことであろう。たとえばこのミクロな二次都市は歩行者を中心の文化が形成される小世界（?!）である。そしてこれに対するマクロな都市は、大量交通機関を軸として形成される時空（?!）である。それはさらにいえ

ば、都市におけるパトスとロゴスの共存(11)であろう。マクロなロゴスとミクロなパトスとの共存(12)(13)、(14)、(15)——高橋)。かかる議論を前にして、かつてシスモンディが「荒廃」した資本主義社会の現実にふれて唱えた「権衡」(「均衡」という処方案を思い出さないものがあるうか。いわく、「人口と所得」の一致、「消費と人口」の一致等々。そして今やふたたび、「パトスとロゴスの共存」、「マクロなロゴスとミクロなパトスとの共存」!

さて、このように、唯物史観の「公式」の簡単な検討を通して、われわれはマルクスの恐慌に対する考えの概観を知ることができたように思われる。要するに、彼は恐慌をブルジョア社会の発展という見地から重視していたのであり、ブルジョア的生産の矛盾の必然的・不可避免的な爆発として、したがって、社会の発展からみて進歩的な要因として、これをとらえていたということができるのである。そして又このことは、同時に、マルクス以前におけるこの問題を取りあつた経済学者に対する根本的批判をなすものである。

それでは、このような恐慌に対する考え方をもって、マルクスはこれをいわゆる経済学の「区分」(Einteilung)の中でどのように取りあつかっているであろうか。この点を検討してみることになしよう。

第二節 経済学の「区分」と恐慌

マルクスのいわゆる経済学の「区分」(あるいは「篇別」と

いわれるものを、われわれは、『経済学批判』の「序言」(Vorwort)および『経済学批判要綱』(以下『要綱』と略記し、引用はすべてディーツ版による)の中の「序説」(Einleitung)等において見いだすことができる。次にそれらをかかげてみよう。

注11、いわゆる「区分」についてのマルクスの叙述は、この二者のはかに、たとえば、一八五八年二月二日付のラサールへの手紙、同年四月二日付のエンゲルスへの手紙、一八五九年二月一日付のヴァルデマイアーへの手紙、においてもみられ、さらに、『要綱』の中にも同様の記述がみられる。たとえば、『要綱』ノートⅡの二三八—九頁、高木訳、大月書店版(1)、一四六頁、および一七五頁、同訳(2)、一八五頁においてである。

a、『経済学批判』の「序言」

「私はブルジョア経済の体制をこういう順序で、すなわち、資本・土地所有・賃労働、国家・外国貿易・世界市場という順序で考察する。はじめの三項目では、私は近代ブルジョア社会が分かれている三つの大きな階級の経済的諸生活条件を研究する。その他の三項目のあいだの関連は一見して明らかである」(全集、第十三巻、七頁、大月版、五頁)。

b、『要綱』の「序説」

「篇別は明らかに次のようにされるべきである。(1)一般的・抽象的諸規定、したがってそれらは多かれ少なかれすべての社会諸形態に通じるが、それも右に説明した意味であ

る。(2)ブルジョア社会の内部的仕組みをなし、また基本的諸階級が存立する基礎となっている諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それら相互の關係。都市と農村。三大社会階級。これら諸階級間の交換。流通。信用制度(私的)。(3)国家の形態でのブルジョア社会の総括。それ自体との關係での考察。「不生産的」諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移住。(4)生産の國際的關係。國際的分業。國際の交換。輸出入。為替相場。(5)世界市場と恐慌(二八―九頁、大月版(1)、三〇頁)。「序言」は一八五九年一月に、「序説」は一八五七年の八月から九月にかけて(『要綱』大月版(1)のマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所の「序言」八頁参照)、それぞれ書かれている。又、『要綱』自体一八五七年から一八五八年に書かれた労作である。つまり、一八五〇年代の後半の数年において、マルクスは自己の経済学の構想を右のようなものとして書きしるしているのである。これによって分かるように、彼はその構想の最終の部分に「世界市場」(Weltmarkt)に関する研究を予定しているものであり、ここでは「すべての矛盾が過程に登場する」(alle Widersprüche zum Prozeß kommen, 『要綱』一三九頁、大月版(1)、一四六頁)ものとして彼によってとらえられているのである。資本主義的生産の矛盾にみちた運動は、「世界市場」においてそのすべての矛盾をあらわすことになるのである。資本主義的生産の本質がここでもっとも鋭く又強烈に暴露されるのである。さらにマルクスは、この「世界市場」との関

マルクス恐慌論研究序説(後編)

連において「恐慌」をとらえているのであり、資本主義的生産の矛盾は「世界市場」において「世界市場恐慌」となって爆發するものである。ちなみに、マルクスは、「ブルジョア的生産のすべての矛盾は、一般的世界市場恐慌において集合的に爆發し、特殊な恐慌(内容と範囲から見て特殊な)においてはただ散發的、孤立的、一面的に爆發するにすぎない」(Alle Widersprüche der bürgerlichen Produktion kommen in den allgemeinen Weltmarktkrisen kollektiv zum Eklat, in den besondern Krisen (dem Inhalt und der Ausdehnung nach besonderen) nur zerstreut, isoliert, einseitig. 『序説』全集、第二六卷、第二分冊、五三五頁、大月版、七二二頁)と、さらに、「世界市場恐慌において、ブルジョア的生産の諸矛盾と諸対立は一挙に暴露される」(In den Weltmarktkrisen bringen es die Widersprüche und Gegensätze der bürgerlichen Produktion zum Eklat. 前掲書、五〇〇頁、前掲訳、六七五頁)ともいっている。このようにみえてくると、世界市場恐慌はマルクスにとって彼の経済学の中のをすべてを総括する最終的な研究対象であった、ということをかぎがいがい知ることができるとはいうものの、この「最終的」という意味は、ブルジョア社会の「生成・発展・消滅」交替の必然性を説明する上で「最終的」ということである。前節にも述べた通り、ブルジョア社会における生産力の上昇は、恐慌という形態で資本主義的生産關係と衝突することになるのであり、生産力がこの生産關係の

もとでさらにそれ以上に飛躍的に上昇しないことが、恐慌によって如実に示されることになるのである。ここに、資本主義的生産の、したがって、資本主義社会の歴史的・過渡的性格が示されることになる。したがって、「最終的」という意味は、いいかえると、この恐慌の研究を通して資本主義社会のかかる過渡的性格が論証されるという意味において「最終的」なのである。

しかしながら、我国における恐慌の理論的研究に携わっている先学諸氏の多くは、恐慌が世界市場恐慌としてマルクスの経済学の「区分」において最終的地位を占めていることを拠所として——そして又、マルクスは彼の「区分」を未完成のまま残してしまったという判断に基づいて——この「最終篇」たる世界市場恐慌が「ブルジョア経済学の批判の全事業」の「完了」(高木幸二郎氏著『恐慌論体系序説』、大月書店版、八四頁)を意味するものとして、さらに、「動学体系としてまた批判体系として完結さるべき性格をもつ」(富塚良三氏著『恐慌論研究』、未来社版、「はしがき」)ものとして、この「完結」を志すべく、「恐慌論の体系の構築と展開」(前掲書)に邁進することになるのである。^{注12}

注12、さらに、多少ニュアンスの違いはあるが、藤塚知義氏は「完結の体系」についてその著書『恐慌論体系の研究』(日本評論社版)の「序文」で次の如く述べておられる。「このこと(古典学派の継承と批判——高橋)は、この新しい体系『資本論』のこと——

高橋)が、同時に資本主義的生産の矛盾の発現としての恐慌の論理の体系でもあることによって、古典学派の真の批判者たることができた、ということを含意している。しかし周知のように、恐慌の論理にかんするその体系は、明白かつ完結した形でしめされることがなく、そのためにその理解と解釈をめぐって種々の論議をよんでいる。それにもかかわらず、あるいはそれゆえにこそかえって、『資本論』における恐慌の論理体系を追跡することは、その経済学の全体系の理解にとっての核心をなすものといつてよいであらう。『資本論』が「恐慌の論理の体系」であることによって、はじめてこの著作が「古典学派の真の批判者」となりえたのであるが、この体系が「明白かつ完結した形でしめされ」なかったために論議が起つていくという。だが一体、「明白に」示されないものがどうして「真の批判者」となることができるか。問題は二つに一つである。マルクスは『資本論』の中で恐慌の「論理体系」を「明白に」提示せず、それ故、古典学派に対する「真の批判者」となりえなかったか、あるいは、彼はそこで恐慌の理論的説明を「明白に」なし、これを資本主義的生産における基本的矛盾の爆発として位置づけ、更にこれをこの社会における必然的なものとして説明し、そうすることによって、恐慌を説明できずならぬ偶然事として究極的にはありえないと主張してしまうような古典学派等の迷論を、完全に、美事に、「明白に」、打ちくだいているか、この両者のうちの一つであらう。更に、言葉の問題をみてみよう。著者においては『資本論』は「恐慌の論理の体系」でもある。とすると、『資本論』における恐慌の論理体系を追跡すること」は「恐慌の論理の体系における恐慌の論理体系の追跡」ということになってしまふであらう。

まさにタウトロギーというほかあるまい。

だが、このように「経済学の体系」を「完結」ないし「完了」すべきものと考えること自体大きな問題をなすものであるといわなければならない。なぜなら、このように経済学を「完了」ないし「完結」すべき「体系」と考えたのは、マルクスではなく、彼が最大の批判の対象としたA・スミス、D・リカードといった古典派経済学を主とするブルジョア経済学であったからである。ブルジョア社会を永遠不変の社会と見誤り、ブルジョアの生産をもっともすぐれた生産の社会的形態と見なす彼等は、この社会において人々の幸福と福祉とがいかに実現されるかを模索し、そのための完結した体系たる経済学の「構築」をめざすのである。ところが、マルクスの経済学はこれらのブルジョア経済学とは根本的に異なるものである。というよりも、ヨリ適切には、これらのブルジョア経済学の根本的批判の上に立つものである。彼が経済学の「区分」を考える場合に、スミス、リカードのごとき「体系の完結」などを念頭においたのでは毛頭ない。この場合の彼の考察の中心にあったものは、前引用の「序言」でも明らかのように、「ブルジョア経済の体制の考察」であり、さらに、「序説」の「3 経済学の方法」の冒頭に明記されているように、「あるあたえられた国の経済学的な考察」(要綱、二二頁、大月版(1)、二二頁)であり、そのための「区分」あるいは「篇別」であるということである。したがって、この「あるあたえられた国の経済学的な考察」という

マルクス恐慌論研究序説(後編)

ことと「体系の完結」ということは本質的な相違をもつものであるといえよう。^{注13}

注13、我国において、かかる「体系の完結」を唱える恐慌理論の研究者とならんで、同様に、「原理論の体系的純化の完成」という形で「体系の完結」をめざして時代錯誤的議論を展開しているのが宇野弘蔵氏である。氏は著書『経済学方法論』(東京大学出版会)の中の「II 経済学研究の分化」の「一 原理論の体系的純化と段階論の必然性」において次の如く主張される。「マルクスにとつては、資本主義は発達すればする程、理論的に想定せられる純粋の資本主義社会に近似するものとして、その経済学の原理論に客観的根拠を与えることになったのであるが、しかしこの資本主義の傾向が、十九世紀末には種々なる事情によつて、必ずしもそういうように一面的には展開されなくなることが明らかとなつてこないと、経済学の原理論の体系的純化は決して完成しえないのであった。そしてまた十九世紀末以来の金融資本の時代が解明されない、資本主義の発生期・発展期も、その発展段階として明確に規定されないものであった」(三七頁)。つまり、氏によると、マルクスは『資本論』において「原理論の体系的純化」の「完成」を行ひえなかったのであるが、それは、マルクスの時代が「純粋の資本主義社会に近似」しつゝあつたからである。この「完成」のためには「十九世紀末の種々なる事情」や「金融資本の時代」を考慮に入れなくてはならぬのである。かくして、かかる歴史的發展を経験した宇野氏自身の双肩に「経済学の原理論の体系的純化」という「偉業」がかかっているというわけである。だが、残念ながら、マルクスにとつて

「純粹の資本主義社会」(つまり、「資本家と労働者と土地所有者との三階級からなる」社会。宇野氏著『経済原論』、岩波全書版、一二頁参照)などは問題ではない。彼にとって問題となる社会は、歴史的に与えられ、それ故、複雑な諸関係を内包した、現実の資本主義社会なのである。その現実の資本主義社会とは、資本主義的生産関係がもっとも支配的で、他の諸関係はこの生産関係によってその社会における存在形態が規定されているような社会である。『資本論』の冒頭の周知のパラグラフ、「資本制的生産様式が支配的な諸社会の富」という場合の「社会」とは、それ故「純粹資本主義」の「社会」ではありえない。又、資本主義の発展は、「資本家と労働者と土地所有者」のみからなる「純粹資本主義」への「接近」の過程でもさらさらありえないし、一八六〇年代までも(古い封建的生産関係が解体され新たに資本にもとづく生産関係がますます徹底のにつくりだされるとはいえ)かかる過程でなかったことは当然のことである。むしろ、資本主義的生産関係が支配的になっても、他の諸関係はこれに支配され従属された形で存続しうるのであり、そのことが資本にとって有利となる場合には資本は積極的にそう行動するのである。これに関して、マルクスは『資本論』第三卷第五章「階級」においてこう述べている。「イギリスでは、経済的編成からみた近代的社会が最も広汎・最も典型的に發展していることは争うべくもない。とはいえ、この国ですら、この階級的編成は純粹には現われない」(第三卷、九四一頁、長谷部訳、青木書店版⑤、一二四五頁)。

それでは、「あるあたえられた国の経済学的考察」(ein gegeo-

nes Land politisch-ökonomisch betrachten)とはどのようなことを意味するものであろうか。それは、まず歴史的に与えられた現実の社会——資本主義社会——を考察の対象としてとりあげ、この社会のもとの生産と交換の法則を追求すること、そして、この法則の貫徹の結果この社会と人間の維持と再生産がいかに行われるかを究明すること、さらに、この法則の貫徹によっていかにこの社会が發展し、いかにこの發展に伴って諸矛盾が高まり、いかに新しいより高次の社会への移行の諸条件がこの社会内部に形成されるか、その勢力と方向を解明すること、これである。^{注14}そして、この場合マルクスの思想の根本にあったものは、歴史の原動力は英雄でも政治家でも哲人でもない日々額に汗し手を泥にまみれて働いている人民大衆であり、彼等こそ唯一の歴史の推進者である、という鉄のごとき確信である。さらに、この資本主義社会を打倒し新しいより發展した社会(社会主義社会)を実現する勢力は近代の賃銀労働者階級(プロレタリアート)であり、これのみであること、彼等こそ旧い社会の墓掘人であると同時に新しい社会の主人公であること、これこそ彼の経済学体系の根幹をなす思想であるといえるのである。マルクスの「区分」ないしは「篇別」はこのために書きとめられたのであって、「完結した体系」としての経済学をめざしたものではありませんということである。そして、かかる観点において「世界市場恐慌」は最終的な研究対象であったということである。

注14、複雑な事柄を平易な言葉でしかも厳密性を失うことなく説明することに關して天才的であつたマルクスの親友エンゲルスは、この点に關して「經濟科學の任務」を次のように述べている。「經濟科學の任務は、むしろ、新たに現われつつある社會的弊害が現存の生産様式の必然的な結果であると同時に、またこの生産様式の分解がせまっている印でもあることを立証し、そして、この分解しつつある經濟的運動形態の内部に、そういう弊害をとりぞくべき將來の新しい生産および交換の組織の諸要素を見つけたることである」(『反デューリング論』、全集、第二〇卷、一三九頁、大月版、一五五頁)。

さて、なるほどマルクスは『資本論』や『學說史』の多くの箇所において、恐慌の立入った説明は後に述べるべきことをいい、さらに、『資本論』の取りあつかう理論的領域についての限定をこの労作それ自身の中で与えている。たとえば、『資本論』では、「近代の産業がそのうちで運動する回転循環——静止状態、活気の増大、繁榮、過剰生産、破局、沈滞、静止状態、などという、その詳しい分析は吾々の考察圏外に属する循環——」(第三卷、第二章、三九四頁、長谷部訳、青木版④、五一頁)といい、『學說史』では、「現實の恐慌は、資本主義的生産の現實の運動、競争と信用からのみ説明することができる」(全集、第二六卷、第二分冊、五二三頁、大月版、六九三頁)といっている。さらに、『資本論』の理論的領域の限定については次のように述べている。「生産諸關係の物象化・および生産当事者たちに

マルクス恐慌論研究序説(後編)

對する生産諸關係の自立化・の叙述においては、吾々は、世界市場・その状況・市場價格の運動・信用の期間・産業および商業の循環・繁榮と恐慌の交替・による諸関連が彼等にたいし優勢で彼等を無意志的に支配する自然諸法則として現象し、彼等にたいし盲目的な必然性として作用する、その仕方様式には立入らない。というのは、競争の現實的運動は吾々の計画の範圍外に横たわり、吾々はただ、資本制的生産様式の內的構造のみを、いわばその觀念的平均において叙述すべきだからである」(第三卷、第四八章、八八五頁、長谷部訳、青木版⑤、一一七一頁)。

ここから、「あるあたえられた國の經濟學的考察」における彼の「区分」は彼によつて完成をみずに終つたものである、という判断を下すことは可能であらう。『資本論』は文字通り「資本」(ヨリ嚴密にいえば「資本一般」)に關する「理論」であり、それ以外の理論ではありえない。したがつて、「觀念的平均」(『理想的平均』in ihrem idealen Durchschnitt)において叙述されたこの著作においては、それ以外の諸要素は、あるものは捨象されうるし、又あるものはこの「資本」の解明に必要な限りにおいて取り入れらるべき性質をもつものである。とはいへ、いずれにしても『資本論』は「資本」の法則を解明した「理論」であるということにはかわりない。したがつて、「区分」はマルクスにとつて完成をみずに終つたものであるという判断は、一定の論拠をもつものである。しかしながら、「資本制的生産様式の內的構造」(die innere Organisation

der kapitalistischen Produktionsweise)を、あるいは、「ブルジョア社会の内部編成」(die innere Gliederung der bürgerlichen Gesellschaft, 前掲『要綱』「序説」)を考察する場合忘れてならぬことは、この「資本」が「ブルジョア社会のいっさいを支配する経済力」(『要綱』二七頁、大月版②、二九頁)であるという認識である。ブルジョア社会において、一切の諸関係はこの「資本」あるいは「資本関係」によって規定され、色づけられ、位置づけられているのである。したがって、「あるあたえられた国の経済学的考察」においては、まずなによりも、この資本主義社会における基本的生産関係たる「資本」とりあげ、この「資本」の本質の究明を行うことが決定的な重要性をもつことになるのである。そして、この「資本」の正しい把握によつてはじめて、この社会におけるこれと有機的関連をもつ他の諸関係が明らかにされうるものである。又、この把握によつてのみ、この社会の諸矛盾が恐慌となつて爆発する必然性も解明されることになるのである。マルクスが、「資本概念の厳密な展開が必要であるのは、資本自体——その抽象的模写がその概念である——がブルジョア社会の基礎であると同様に、資本概念が近代の経済学の基本概念であるからである。関係の基本前提のするどい把握から、ブルジョア的生産のいっさいの矛盾が明らかにならなければならないし、資本が自分自身をのりこえてすすみでるその限界も明らかにならなければならない」(『要綱』二二七頁、大月版②、二五二頁、傍点——高橋)とのべると

き、右にみたような資本についての考察、あるいは又過剰生産恐慌^{注15}についての考察を知ることができるのである。したがって、世界市場恐慌は彼の「区分」において最終的な位置を与えられているというものの、この本質に関する基本的説明はすでに「資本」の説明において与えられているし、又与えられなければならないということができるであらう。^{注16}

注15、同じ『要綱』の中でさらに次のようにもべている。「資本はやすみなく普遍性をもとめているが、この普遍性は、資本自身の本性に制限を見いだす。この制限は、資本の発展のある一定の段階で資本自体がこの傾向の最大の制限となることを認識させ、そしてそのために資本自体による資本の止揚に向つておしすすめることになる」(三二—三四頁、前掲訳、三三八頁)。

注16、さらに周知のように、マルクスは一八六二年十二月二八日付のクーゲルマンへの手紙において次のようにのべている。「これ『経済学批判』に続く『第二の部分』——高橋は第一分冊の続きですが、『資本』という題で独立にできます。そして、『経済学批判』というのはただ副題としてつくだけです。それは、実際はただ、第一篇の第三章をなすはずだったもの、すなわち「資本一般」を含んでいるだけです。したがって、諸資本の競争や信用制度はそれには含まれていません。イギリス人が「経済学の原理」[the principles of political economy]と呼ぶものは、この巻のなかに含まれています。それは核心です(第一の部分とともに)。そして、それに続くものの展開は(社会のさまざまな経済的構造にたいするさまざまな国家形態の關係などを別とすれば、すでに提供されているものを

基礎にして他の人々によっても容易になし遂げられるでしょう。」
このように、マルクスは「資本一般」に関する説明を（第一の部分とともに）「核心」と呼んでいる。そして、この「核心」たる「資本一般」を正しくつかまえることによって他の諸関係は容易に理解されるのとべているのである。

だが一步譲って、マルクスは「世界市場恐慌」をもってこの「区分」を「完結」＝「完了」させるはずであったと考えて、この「区分」の最終に位置づけられてある「世界市場恐慌」による「完結」をめざし「恐慌論の体系の構築と展開」を試みることは、現在のわれわれにとって果して問題なきものであろうか。なるほどマルクスは、すでにみたように、彼の「区分」の最終項目たる「世界市場」あるいは「世界市場と恐慌」について、あるいはそれ以前の諸項目についても、一定の留保を『資本論』等において与えている。それ故、ここから、彼の「区分」は未完成であったという判断は下しうることであるし、又、この最終項目たる「世界市場と恐慌」の叙述によつてはじめて彼の経済学の研究——いいかえれば、それは「あるあたえられた国の経済学的考察」ともいえる——は、したがつてまた彼の「区分」も、ブルジョア経済学の立場とは異なるものといふものの、「完結」ないしは「完了」をみるべきものであった、ということとは主張しうることである。しかしながら、注意しなければならぬことは、エンゲルスが主張することく、「経済学は、本質上一つの歴史的科学である」（『反デューリング論』、

全集、第二〇巻、一三六頁、大月版、一五二頁）ということである。

それはその性質上「歴史的な素材、すなわち、たえず変化してゆく素材を取り扱う」（同右）ものである。歴史的に与えられた現実の社会を考察対象とし、ここでの「相争う諸事実とそれらの隠された背景をなしている現実の諸対立」（一八六八年十月十日付マルクスのエンゲルスへの手紙）とを考究することこそ、経済科学を経済科学たらしめるものというべきものである。したがつて、マルクスの経済学は当然歴史的に与えられた現実の社会、資本主義社会を考察対象とするのである。『資本論』の「第一版への序言」で述べられた次の文章は、まさに重要な文章であり、したがつて又、しばしば引用される箇所である。「私がこの著作で研究せねばならぬものは資本制的生産様式、および、これに照応する生産Ⅱならびに交易諸関係である。これらの行われている典型的な場所は、今日まではイギリスである。これ、イギリスが私の理論的展開の主要な例証として役立つ所以である」（第一巻、六頁、長谷部訳、青木書店版（一）、七一頁）。マルクスは「あるあたえられた国の経済学的考察」としてイギリスを取りあげている。それは、イギリスがマルクスの生活した歴史的時代においてもっとも「典型的」に資本主義的生産の発展をみているところだからである。『要綱』は一八五七—一八八一年に書かれ、『資本論』第一巻は一八六七年に出版されている。したがつて、ほば一九世紀中葉においてイギリスではもっとも「純粹な経過」（同右）が保証されるような資本主義的生産の發

展が行われていたわけである。かくして、このような歴史的時代において彼の経済学の「区分」は書きとめられていたわけである。ところが、資本主義のその後の発展は、たんに「一国」イギリスにとどまることなく、ヨーロッパの各国やアメリカをもその発展の渦中に巻きこみ、まさに世界包括的な体制にと発展をみるのであり、かくてそれは資本主義の発展上における新たな時代を画することとなった。マルクスの歴史的時代たる産業資本主義の時代から、帝国主義Ⅱ独占資本主義の時代へと資本主義は巨歩を進めるのである。この帝国主義の経済的本質を暴露したのがレーニンであり、『帝国主義論』にその結実をみるのである。彼は、この労作の「フランス語版とドイツ語版への序文」において次のように述べている。「本書の基本的な任務は、すべての国の争う余地のないブルジョア統計の総括的資料とブルジョア学者たちの告白とにもついて、国際的な相互関係における世界資本主義経済の概観が、二十世紀の初めに、すなわち最初の全世界的な帝国主義戦争の前夜に、どのようなものであったかをしめすことであつたし、いまもなおそうである(全集、第三卷、一七七頁、邦訳、大月版、二二七頁、と。レーニンも、マルクスとまったく同様に、歴史的に与えられた現実の社会を考察する。だがその場合、レーニンにおいては考察の対象はすでに「一国」ではありえず、「国際的な相互関係における世界資本主義経済」(Всемирного капиталистического хозяйства, в его международных взаимоотнош-

ениях)である。そしてこれの考察は、レーニンの言葉で換言すれば、「現在の戦争と現在の政治とを評価するといにそれを研究しておかなければならぬ」にも理解できない根本的な経済問題」(Основном экономическом вопросе, без изучения которого нельзя ничто понять в оценке современной войны и современной политики, 同右、一七六頁同訳、二一六頁)なのである。『資本論』は産業資本主義の基本的経済法則を解明したものであると同時に、それは資本主義一般の経済法則を解明したものである。レーニンは、この『資本論』を武器として新たな歴史的現実これを適用し、新しい資本主義Ⅱ独占資本主義の基本的な経済的諸特質Ⅱ諸法則をあげき出したものである。したがって、『資本論』から『帝国主義論』への発展は、現実の歴史的社會における産業資本主義の段階から帝国主義の段階への変化Ⅱ発展の理論的反映である、ということができよう。マルクスの書きしるした「区分」は、それ故、この新しい発展段階において、その内容も変化し、この段階における経済的諸特質を解明すべき性質をもたなければならぬ。今、「世界市場恐慌」に限ってみるならば、資本主義のこの新しい発展段階においては、「世界市場恐慌」とならんで「帝国主義戦争」がブルジョア社会の一切の矛盾の爆発形態として取りあげられなければならない。とりわけ後者は、この段階における「前提をのりこえることへの全般的な指示であり、新しい歴史的形態の受容への促進」(要綱、一三九頁、大月版(1)、一四

六頁)として、はたまた「交換価値に立脚する生産様式と社会形態の解体」(同右、一七五頁、大月版②、一八五頁)として、決定的に重要な意義をもつものである、といえよう。

このようにみえてくると、科学的経済学は、発展した新たな歴史の現実に対応して、この現実の歴史的社会における基本的生産関係とそのもとの基本的法則の在り方を追求・暴露すべき意義と課題をもつものであるということができるのであり、したがって、その体系は歴史の発展に従って一層発展・豊富化させられるべき性質をもつものであり、それ故、決して完結することのない体系である、ということができよう。レーニンの明らかにした独占資本主義の段階は、現在ではさらに、国家のあらゆる部面への全面的な介入による帝国主義の維持・強化の体制たる国家独占資本主義へと発展しているのである。それ故、この段階において、マルクスの「区分」の「世界市場恐慌」による「完結」をめざし、「恐慌論の体系の構築と展開」を試みることに、深甚の疑いをいだかざるをえないのである。

さて、以上の考察によって、経済学の「区分」において最終に位置づけられた「世界市場と恐慌」のもつ意義とこれと『資本論』との関連が、一応とらえられたように思われる。要するに、「世界市場恐慌」は、ブルジョア的生産の一切の矛盾の爆発の形態であると同時に、又その一時的解決の形態であり、ブルジョア社会における生産力の発展が資本主義的生産関係に制限を見いだすということが恐慌によって如実に示されるので

あり、したがって又、この恐慌によってブルジョア社会の歴史的・過渡的・一時的性格が顕在化するものであるということができよう。それ故、恐慌の研究は、ブルジョア社会のかかる過渡的性格を暴露するものであるといえるが、これに関する基本的説明はすでに『資本論』において与えられているし、又、与えられなければならない、ということである。

次にわれわれは、マルクスおよびエンゲルスが彼等の当面した具体的な恐慌に関してどのような考察を与えているかをみてみることにしよう。その際問題の中心となることは、この恐慌によって直接に様々の影響を受ける人々——なかならず賃銀労働者階級——に対し、科学的経済学の祖たる彼等がいかなる考えをいだいているかということである。換言すれば、産業循環の一面面としての恐慌において、賃銀労働者階級がどのような様相をとるか、さらに又、繁栄の到来は彼等の様相のどのような変化をもたらすか、という問題でもある。

第三節 産業循環と労働者階級

われわれは、第一節において、マルクスが恐慌をブルジョア社会の発展の見地からきわめて重視していたことをみた。恐慌はブルジョア社会をおびやかす大暴風雨であるとともに、それは「社会革命の時期の始まり」(『経済学批判』、「序言」)でもある。勿論、恐慌はあくまで「経済的基礎の変化」(同右)であり、このことが即ブルジョア社会の変革でありえないことは無論であ

るが、この「経済的基礎の変化」は、必然的にこの恐慌によって直接的な影響を受ける人々、とりわけ賃銀労働者階級の意識に革命的エネルギーとして反映することになるのである。したがって、それは政治的変革のための諸条件の成熟を極度におしすすめるものである。エンゲルスは、「恐慌が政治的変革の最も強力な槓杆の一つだということは、すでに『共産党宣言』のなかにも述べてあり、『新ライン新聞』の『評論』のなかでも一八四八年をも含めて詳論してあります」と、一八八二年一月二五日付のエードゥアルド・ベルンシュタインへの手紙において述べている。このエンゲルスとマルクスの共同執筆による『新ライン新聞、政治経済評論』の第四号『評論』(一八五〇年三―四月)には、その最後の箇所に次の如く述べられている。

「アメリカが過剰生産によってひきおこされた後退運動に、はいった以上、われわれは、恐慌が来月はこれまでよりもやや急速に発展するものと期待してよい。大陸の政治的事件も同様に日一日とますます大詰めをめがけておしすすんでおり、私がこの『評論』ですでに何回も述べた商業恐慌と革命の同時の到来も、ますます不可避となるであろう。どうか運命が実現されますように！」(全集、第七巻、二九五頁、大月版、三〇三頁)。

さらに、『共産党宣言』には次のように記されている。
「〔商業恐慌〕で明白になるように——高橋〕社会がもつ

ている生産諸力は、もはやブルジョア文明やブルジョアの所有諸関係を促進する役にはたたなくなっている。それどころか、生産諸力はこの所有諸関係にとって強大になりすぎて、いまではこの所有諸関係が生産諸力の障害となつてゐる。そして、生産諸力がこの障害を突破するとき、それはブルジョア社会全体を混乱におとし入れて、ブルジョアの所有の存立をあらゆるくする。ブルジョアの諸関係は、自分のつくりだした富をいれるには狭すぎるようになったのである。——ブルジョアジはどういう手段でこの恐慌をきりぬけるのだろうか？ 一方では、やむなく大量の生産諸力を破壊するという手段で、他方では、新しい市場を獲得し、またまえからの市場をいっそう徹底的に開発するという手段で、それをきりぬけるのである。つまり、どのようにして？ つまり、いっそう全面的で、いっそう激烈な恐慌を準備することによって、また恐慌予防の手段を減らすことによって、それをきりぬけるのである。——ブルジョアジが封建制度を打ち倒すのに用いたその武器が、いまやブルジョアジ自身に向けられる」(全集、第四巻、四六八頁、大月版、四八一頁)。

このようなマルクスおよびエンゲルスの考え、特に『評論』において鮮明に打ち出されたこのような主張は、たんに個人的な願望や主観的意図によるものではなく、過去の歴史の厳密な分析からみちびき出された貴重な命題であつたということを、われわれはエンゲルスのマルクス著『フランスにおける階級闘

争』への「序文」——これは一八九五年に執筆された——において、うかがい知ることができる。そこには次のように述べられている。

「第一回の検証は、一八五〇年の春以来、マルクスがふたび経済学研究の余暇を得て、最初にまず最近一〇年間の経済史に着手したことによってなされた。この研究によって彼がこれまで不備な材料にもとづいて、半ば先験的に結論していた次のことが、事実そのものから完全にマルクスにはつきりしてきた。すなわち、一八四七年の世界的商業恐慌が、二月と三月の革命のほんとうの生みの親であったこと、そして一八四八年の半ばからだんだんに回復し、一八四九年と一八五〇年に全盛に達した産業の好況が、あらたに強化したヨーロッパの反動を活気づけた力であったということである。それは決定的なことであつた」(全集 第七巻 五二頁、大月版、五一九頁)。

このように、経済的な恐慌が政治的変革を行う場合のデコッ槓杆となりうると考えた彼等マルクスおよびエンゲルスは、前記『評論』の最後の言葉「どうか運命が実現されますように」(Que les destins s'accomplissent!)^{注17}にも示されるごとく、以後恐慌の到来を待ちわびることになるのである。

注17、この恐慌を待ちわびる彼等の態度は、特に、彼等の手紙の行間にみい出される。その顕著なものとしては次のようなものがあげられる。一八五一年三月一九日付マルクスのエンゲルスへの手紙、同

マルクス恐慌論研究序説(後編)

年七月三〇日付エンゲルスのマルクスへの手紙、同年七月三一日付マルクスのエンゲルスへの手紙、一八五七年六月一八日付マルクスのラヴロフへの手紙、同年十二月二日付マルクスのラサールへの手紙、等である。

このような彼等の態度は、かのシスモンディとはまさに正反對をなすものである。恐慌による悲劇に直面した彼は、なんとかこの悲劇を回避しこの矛盾をなくそうと努めるのであるが、彼の努力はとうてい実を結びえないものであつた。というのは、彼の考察の基盤そのものがブチブルジョア的なものであつたからである。現実の生産の在り方、そこから規定される全社会制度そのもの、を前提し、これを不変のものとみなして、そのうちで調和のとれた均衡的な発展をめざすことほど不合理なことはいない。恐慌は、まさにこの現実の生産と交換そのものから生ずる不可避的な、したがって又、必然的な経済現象だからである。それ故、彼シスモンディが、資本主義的生産には矛盾があること、この下においては生産は必ず消費をこえて行われること、労働者・大衆は必然的に所得を制限され消費を制限されざるをえないこと、これらのことを指摘したことは彼の大きな功績をなすものであり、古典学派の楽天性に対する、頂門の一針、ともいふべき鋭い批判をなすものではあるが、しかしながら、この恐慌を現実の資本主義的生産そのものから正しく説明を加えることができず、均衡を取り戻すために中世の生産様式に逃避してしまうというような彼の解決策は、完全に反動

的なものとなってしまふのである。

このようなシスモンディとは異なり、マルクスおよびエンゲルスは、恐慌を資本主義的生産の下で不可避的な・又必然的な現象ととらえるのであるが、そののみにとどまることなく、さらに積極的に、ここに、この生産と交換のすでに古くなって腐りかけた制度を打ちくずす手がかかりを見いだしているのである。恐慌において、この旧制度を打ちくずすべき主体的ならびに客体的条件の成熟がもつとも鮮明に現われるのであり、なかならず、この恐慌によって直接的に彼等の生存をおびやかされる賃銀労働者階級Ⅱプロレタリアートは、まさに変革における主体的勢力としてその役割が一層明白なものとなるのである。

したがって、かかる意味において恐慌の問題は、まさに「労働者階級の運命」(高木幸二郎氏著『恐慌論研究序説』、一四二頁参照)の問題たるべきものであり、そして又、これの「科学的説明はすべて、資本主義にとって、死を覚悟せよ」[Memento mori]ということの意味する」(エルスナー著『経済恐慌』、邦訳、大月書店版、一四頁)ということができるのである。

さて、それでは、この恐慌によってプロレタリアートはどのような影響をこうむるものであろうか。もつとも直接的でもつとも強力な打撃は、彼等の生産場面が奪われる失業である。一八六六年の恐慌によるイギリス労働者階級の状態について、マルクスは『資本論』第一卷第二第三章第五節の(d)「労働者階級の最高給部分に及ぼす恐慌の影響」の中で、次のような「モー

ニング・スター」の「一通信員」による報告を載せている。

「ロンドンの東部のポブラー、ミルウォール、グリーンニッジ、デットフォード、ライムハウス、およびカニング・タウン諸地区では、少くとも一万五千人の労働者ならびにその家族が非常な困窮状態に陥ちいつているが、そのうち三千人以上は熟練機械工である。彼等の準備金は六ヵ月ないし八ヵ月間の失業のために使いはたされている。……私は救貧院(ポブラー)の門口までやっとたどりついた。というわけは、そこは飢えた群集に包囲されていたからである。彼等はパン券を待っていたのだが、まだその分配時間がきていなかった。

構内は大きい四角形をなし、四方の塀には差掛け屋根が設けられている。厚い積雪が庭の中央にある敷石用の石を覆っていた。そこには羊の囲いのように柳の枝で垣をめぐらされた幾つかの小さい場所があって、天氣がよければ人々がそこで労働するのである。私が訪ずれた日には、囲い地は、誰もそこにいられないほど雪に埋れていた。だが人々は、張出し屋根の下で敷石の粉碎に従事していた。各人は大きい敷石に腰をかけて、霜に覆われた花崗岩を五ブッシュェルだけ砕くまで重いハンマーで叩いていた。そこで彼は一日の仕事を終えたことになり、三ペンス(銀貨二グロシエン、六ペニヒ)とパン券を貰ったのである。構内の他の方面にはよろよろした小さい木小屋があった。戸を開けてみると、いっばいになった人々が、お互に暖をとるためにひしめき合っていた。彼等は

填絮^{まはだ}をつくりながら、彼等のうちの誰が最低量の食物で最も長く労働しうるかを論じあつてゐた。長続きすることが名譽だったからである。この一救貧院だけで七千人が救助を受けていたが、そのうちの数百人は、六ヵ月ないし八ヵ月前には、この国における熟練労働の最高賃銀を稼いでいたのである。貯金をすっかり使いはたしても質草がまだ何かあるかぎりには教区にすがることを尻込みする者がこんなに多くなかったとすれば、彼等の数は二倍にもなったであらう」(七〇五—六頁、長谷部訳、青木書店版②、一〇三〇—三二頁。さらにマルクスは続けてトリー党の一新聞からの抜萃を載せている。

「一八六六年の恐慌の余害については、つぎにトリー党の一新聞からの抜萃を示そう。ここで問題となるロンドンの東部は本章の本文で論及された鉄船建造業の所在地であるばかりでなく、つねに最低限以下に支払われているいわゆる『家内労働』の所在地でもあることを忘れてはならぬ。『昨日、首都の一部に怖るべき光景が展開された。イースト・エンドの数千人の失業者が黒旗〔当時の労働者は赤旗でなく黒旗をおしたてた〕をもって大衆示威をやったわけではないが、人の流れは威風堂々たるものがあつた。これらの人々がどんなに苦しんでいるかを想起しよう。彼等は餓死しかけてゐる。これは単純で怖るべき事実である。その数は四万もある。……吾々の眼前で、この驚嘆すべき首都の一地区で、古今未曾有

の老犬極まる富の蓄積と隣りあわせに、四万人が困窮のあまり飢餓に苦しんでいるのだ！ そうした数千人がいまや他の地区にも侵入している。彼等はいつも餓死に瀕しているの、吾々の耳もとで苦痛を叫び、天に向つて号叫し、彼らの悲惨な住宅から、仕事を見つけるのは不可能であり乞食をしても駄目なことを吾々に語つて聞かせる。地方の救貧税納付義務者たちが、教区の誅求によつて、みづから被救恤的窮乏のきわまで追いつめられてゐる。』(『スタンダード』紙、一八六六年四月五日付。)(同右、七〇七—八頁、同訳、一〇三二—三三頁)

このように、一八六六年の恐慌は、イギリスの労働者階級を——その最高給部分すらをも——極端な貧困と飢餓の淵においやつたのであり、彼等を救貧院からのわずかの施しにむらがらせ、又、数千人の労働者をして、彼らの飢餓を訴えてきりぬけるべき『威風堂々』たる行進にかりたてたのである。ところが、この労働者大衆の餓死寸前の窮乏とならんで、「古今未曾有の老犬極まる富」が資本家の倉庫の中で販売不能のために貯蔵されてゐるのである。労働者階級がその生存を確保するためにはいかなる行動をとるべきか、この貧困の原因はどこにあるのか、そして、どうしたらそれを根本的に解決しうるか、かかる考察を、このにがい経験たる恐慌を通して、労働者階級はたき込まれるのである。エンゲルスが恐慌を「政治的変革のもつとも強力な槓杆の一つ」であると述べるとき、このような恐

慌による労働者階級の悲惨な状態と、そこからの労働者としての彼等の意識の向上を念頭においていたことは当然のことである。

彼も又、『イギリスにおける労働者階級の状態』の中で、次のように述べている。(この著作は一八四五年に書かれたものであり、著者は三年前の一八四二年の恐慌を経験しているわけである。)

「(海外での恐慌とイギリスでの恐慌との関連を説明したあと——高橋) 以上のことから、繁栄の絶頂に達した短期間をのぞき、常時イギリスの工業は、ちょうどもっとも活況を呈する数ヶ月間に市場で要求される商品量を生産することができ、ために、労働者の失業予備軍をもっていなければならぬ、という結論がでてくる。(中略) この予備軍は、恐慌のときには驚くほどの多数にのぼり、繁栄と恐慌の中間と目される時期にも相変わらずかなりの多数に達する——この予備軍こそ、イギリスの「過剰人口」であって、彼らは乞食や、盗みをしたり、道路掃除や、馬糞ひろいや、手押車か驢馬による荷運びや、呼売りの行商や、ときたまありつく個々のつまらない仕事をしたりして、やつのことでみすばらしい暮らしをしている」(全集、第二巻、三一四—五頁、大月版、三一五—六頁)。

そして、さらに次のように述べる。

「(一八四二年恐慌に際して——高橋) 工場は休止し、雇い

主からは仕事をもらえなかった失業労働者は、いたるところの街頭に立ち、ひとりひとりで、あるいは集団をつくって乞食をし、おおぜいで舗道をとりまき、とおりかかった人たちに救済をもとめた——しかし彼らは、ふつうの乞食のように、はいつくばって物を乞うたのではなく、自分たちの人数と、その態度とことばによって、おどしつけるようにして物を乞うたのである。このような状態は、レスターからリーズまで、マンチェスターからバーミンガムまでにある、あらゆる労働者地区でみられた。あちこちで、ばらばらに暴動が起こった。たとえば、七月に起こった北スタフォードシアの製陶業における暴動がそれである。このうえもなくすさまじい興奮が労働者のあいだにみなぎり、ついにこの興奮は、八月になって工場地方の全般的な蜂起となって爆発した。私が一八四二年の一月末にマンチェスターにきたときには、まだいたるところの町角にたくさんの方々の失業者が立っていて、多くの工場はまだ動いていなかった」(前掲書、三二八頁、大月版、三一九—二〇頁)。

このようなイギリスの労働者階級の状態は、エンゲルスの本書執筆中にも再び進行していたのであり、その結末について彼は次のように推測しているのである。

「(イギリス工場主階級のプロレタリアートの困窮状態についての無知と無責任——高橋) だからこそまた、グラスゴーからロンドンにいたる全労働者階級が、自分たちを組織的に

搾取し、そのちに、情け容赦もなくその運命のままに見ず
ててしまう富者にたいして、深いうらみをいだいているので
ある——このうらみは、それほど遠くないうちに——その時
期はおおよそ計算することができる——革命となって爆発す
るにちがいない。この革命にくらべれば、第一次フランス革
命と一七九四年でも、見戯にひとしいであろう」(前掲書、二
五二頁、大月版、二四六頁)。

さて、このようにみてくると、マルクスとエンゲルスは、当
時、経済的な恐慌と政治的な変革とを密接な関連においてとら
えていた、ということが明白にかがいが知れるのであり、恐慌
のもつ歴史的意義は、この恐慌によって、ブルジョア社会のも
とでの労働者階級の革命的エネルギーが極端にたかまるという
点にある、と同時に、さらにこの恐慌が「槓杆」となって政治
的変革をひきおこしうるといふ点にある、ということができる
のである。

しかしながら、恐慌による悲惨な一時期が通過すると、ブル
ジョア社会の「危機」も又峠をこすことになる。工場は徐々に
ではあるが操業を開始し、労働者は失業とそれによる極度の困
窮状態から解放され、工場に復帰することになる。工場の新
たな操業開始は、ブルジョアの生産の新しい循環の開始を意味
するものであるが、それは又、このブルジョア社会の変革的エ
ネルギーの衰退あるいは沮喪を意味するのである。マルクスは
一八六二年十一月十七日付のエンゲルスへの手紙で、ランカシ

ヤーの労働者の「羊のような態度」に憤慨している。すなわ
ち、「僕の見るところでは僕の気分をむしろ害するかもしれない
ものは、ランカシアの労働者たちの羊のような態度だ。そんな
ことは世界じゅうでいまだかつて聞いたこともない」(全
集、第三〇巻、三〇一頁、大月版、二四二—三頁)と。同様にエンゲ
ルスも、プロレタリアートからの革命的エネルギーの喪失につ
いて、一八六三年八月八日付のマルクスへの手紙でこう述べて
いる。「その新版(……)について言えば(エンゲルス著『イ
ギリスにおける労働者階級の状態』の新版——高橋、いづれ
にせよこの時期は適當ではない。というのは、今はいっさいの
革命的なエネルギーがイギリスのプロレタリアートからほとん
ど完全に蒸発しているし、イギリスのプロレタリアはブルジョ
アジーの支配に完全に同意している旨を言明しているからだ」
(前掲書、三三八頁、大月版、二七一頁)。沈滞を越え、中位の活況
からブームにいたる産業循環の局面は、資本主義的生産にとっ
ては「健全な」発展過程ではあっても、それは同時に反動によ
る「完全な支配」をも意味するものであり、労働者階級のこの
古い組織を破壊すべき革命的エネルギーにとつては沈滞^{注18}をもた
らすものとなるのである。とはいえ、ブームに向う産業循環の
過程は、失業者の数を減らし、彼等の賃金をその労働力の価値
に接近させ、ある場合にはこれを陵駕するといふものの、し
たがって又、彼等の生活水準の多少の向上をもたらすといふ
ものの、彼等が資本にとつての奴隸であることには変りなく、

工場等において直接的に資本の鎖にしばりつけられ、機械の附属物として強制労働にかりたてられるという新たな苦痛が彼等を襲うのである。産業循環の諸局面の推移如何にかかわらず、彼等は終生かわることなき資本の奴隷として生きなければならず、賃銀の一時的高騰はこの奴隷をつなぐ「金の鎖の張りの緩み」(『資本論』第一巻、六五〇頁、長谷部訳、青木書店版②、九六一頁)を意味するだけのものである。そして、彼等が工場で受ける資本による直接的な苦痛は、それが増せば増すほど、換言すれば、ブルジョアの生産がブームに向ってその生産力を増大させればさせるほど、それは彼等『プロレタリアート』にとってのさらに一層過酷な苦痛、すなわち、恐慌したがって失業による窮乏という苦痛を準備するものにすぎないのである。だが、その時こそ以前にもましてこの古くさくなくなった社会を葬むりさるべき革命的なエネルギーがわき上る時でもあるのだ。マルクスは、一八六四年十一月四日付のエンゲルスへの手紙で、「集会(同年九月二八日のロンドンにおける国際労働者協会の創立大会——高橋)は、息詰まるほど満員だった(なぜなら、現在明らかに労働者階級の復活が起こっているからだ)」(全集、第三三巻、十三頁、大月版、十頁)といい、さらに同書簡の最後に、「恐慌。大陸では、まだなかなか燃え尽きない(とくにフランス)。それにしても、恐慌は、激しさが減ったかわりに、いまだ頻繁になっている」(同右、十六頁、大月版、十三頁)と述べ、起りつつある新しいエネルギーの昂揚をよろこんでいるのであ

る。

注18、中位の活況からブームへの発展の過程——なかんづくブーム——が反動的なブルジョア階級の「完全な支配」を意味するものであることは、国家独占資本主義の現在における我国にも完全にあてはまる。六〇年代の初めよりいわゆる「高度経済成長」という名の下に、国家が全面的に経済的過程に介入し、意図的にインフレ政策によるブームをあり、労働者階級の革命的エネルギーを一時的に麻痺させてきたということが、我国の状況である。だが、その結果たる累積された諸矛盾は近年社会のあらゆる面に顕在化してきている。鉄の如き必然性をもって貫徹するブルジョア社会の経済法則は、早晚労働者階級にかの久しく忘れられた革命的エネルギーを注入し、歴史の発展における彼等の役割をたたきこむであろう。そして、勿論その場合に決定的役割を果たすが、社会主義的意識で武装した先進的労働者ならびに先進的インテリゲンチヤであり、彼等のたゆまぬ宣伝と組織化のみが革命的エネルギーを正しく発展させるのである。

さて、このようにみると、ここから次のような判断を下すことは大いにありうることである。すなわち、マルクスおよびエンゲルスが恐慌を待ちわびていたのは、これが政治的な変革と密接に関連しており、前者は必然的に後者を呼び起すものだからである、と。あるいは、ここからさらに議論をすすめて、歴史的事実においてはこの両者は相呼応しあわず、政治的な変革は起らず、社会主義国家の成立は彼等の時代に実現しえなかったから、彼等の見通しは誤っていたのだ、とい

つたていの論議である。しかしながら、このような論議こそ一面的であり、したがって、独断的な誤謬というべきものである。彼等マルクスおよびエンゲルスが恐慌を重視していたのは、この恐慌を通して労働者階級の中にブルジョア社会に対する革命的エネルギーが極端に高まるからであり、さらに又、この恐慌がテコとなって政治的変革への発展の可能性があたえられるからである。したがって、その可能性が現実化しうるか否かは、そのほかの諸条件によっても左右されるものであると同時に、恐慌そのものの強さにも依存するものである。エンゲルスは、先にもみたとおり、恐慌を「政治的変革の最も強力な槓杆の一つ」と明白に述べているのであり、さらに又、「恐慌がただちに——というのは六カ月から八カ月のうちに——革命を生み出すかどうかは、なんとといっても恐慌の強度いかにかかるところが大きい」と、マルクスへの一八五二年八月二日付の手紙でものべているのである。さらに、このような議論の決定的な誤謬は、恐慌が政治的変革と結びつけばマルクスおよびエンゲルスの考察は正しいが、結びつかなければ間違っている、といったような、大道の八卦見の信用度を試すが如き態度である。これこそブルジョアの客観主義の愚昧の典型的見本といふべきものである。マルクスおよびエンゲルスは、科学的社会主義者として、恐慌を通して高まった労働者階級のブルジョア社会に対する革命的エネルギーを、いかに変革主体として、意識化し、組織化し、強化し、拡大していくかという立場で、

あるいは又、恐慌を「てこ」として、いかにこれを政治的変革へ結びつけるかという立場で、主体的・積極的にこの到来を待ちわびていたのである。^{注19}客観主義的に、それが政治的な変革になりうるか否かといった議論をのみ問題とすることは、マルクスおよびエンゲルスとは無縁な恐慌に対する態度である、といわなければならない。^{注20}

注19、勿論、プロレタリアートがプロレタリアートとして組織され訓練されるのは、生産の場面においてであり、資本家階級に対抗しこれの専制支配をうち破るための意識と組織は、生産過程における結合労働力としての彼等の立場からもたらされるものであり、彼等はこの過程においてのみ、訓練され、陶冶され、変革における主体として鍛えあげられるのである。さらに又、注18においても述べたごとく、この意識と組織とは、自然発生的にはもたらされるものではなく、彼等の外部から、社会主義的意識をもった革命的な労働者ならびにインテリゲンチヤによつてのみ注入されるものである。だが、恐慌は、その上さらに、直接に彼等の生存の可能性を奪い彼等を極端な窮乏におとし入れることによつて、この燦爛した古くさい生産と交換の組織の廃止を彼等に一層志向させるものである。このような意義をもつものとして、マルクスはブルジョア社会における恐慌をとらえていたことができるのである。

注20、この点についてF・エルスナーは、著書『経済恐慌』の中で次のように述べている。

「マルクス主義が主張しているのは、ただ経済恐慌は通例、その他の事情が有利であれば一つの革命にみちびきうるような強い社会

的緊張をひきおこすということだけである。経済恐慌はかならずしも革命にみちびくものではないとしても、ともかくすべて社会革命は現存の経済秩序の動揺を前提とするものである。このことからしてすべての革命的社会主义者にとってあきらかになることは、経済恐慌のさい彼は資本主義の病床で医者役を演ずべきではなくて、資本主義にとどめをさすために、その恐慌をどのように利用すべきかという可能性を注視しなければならぬということである。マルクスとエンゲルスとあらゆる革命的社会主义者たちはこのようにやってきたのである」(大月版、一九七頁)。

七〇年代前半の我国の現状においては、前述の通り(注10参照)なみいるシスモンディ主義者と並んで、病める患者の「日本資本主義」のベッドのかたわらで、これに治療をくわえ投薬するヤブ医者どもにもことかかないのである。たとえば、一九七四年十月二〇日付朝日新聞朝刊に掲載された記事「新貧乏物語③——吹きさらしの裏町——」に対して「私の提言」として述べられている立命館大学教授二場邦彦氏の意見をみよ。この「新貧乏物語③」は、七四年の不況の中で中小企業及び零細企業がいかに苦痛のどん底にいるか、大企業・大独占の重圧の下でいかに彼等が「景気の調節弁」として過酷な条件で呻吟させられているか、それにひきかえ、大独占の下での労働者がどのような特権的諸条件をもつてぐまれた生活をしているかを、具体的な実例と赤裸々な描写でもつてわれわれに示してくれるすぐれた読物である。さて、これに対してわが二場邦彦氏による「提言」はどのようなものであろうか。この歯をくいしばって生きている中小企業に対する氏の「提言」は、もっぱら政府による経済政策の充実に終始されているのである。「政府は、具体的な

中小企業政策をあれこれ考える前に、独占禁止政策の充実をはかるべきである」という氏の主張から、「国の行うべきこと」として次の三点があげられている。「第一に、中小企業庁は、公取委の発表している独禁法改正試案を原則として支持する態度をただちに表明すべきである。」「第二は、独禁法違反行為に対する罰則の強化である。」「第三は、違反行為を監視する体制の整備である。」「ブルジョア独裁の国家に対してかかる「提言」を行うこと自体国家についてのまったくの無理解を自己暴露するものでしかありえないであろう。果して、ブルジョア独裁の社会を積極的に維持し強化しようとするならば、ブルジョア政府及びその忠実な下僕たる官僚群が、このブルジョア独裁をおびやかすような法律や制度を本気で作ることがありうるであろうか。なるほど世間の非難に対して一定の法律上のいし制度上の改革を行うことはありえよう。だが、かかる改革はブルジョア独裁にとって何の痛痒も感じさせないものであることは明らかではなからうか。中小企業や零細企業に対する大企業・大独占による重圧をブルジョア政府によるかかる政策によって解決しようとすることは、本人の意図はともかく客観的には、人々をして事態の本質から目をそむけさせるものであるか、あるいはヨリ厳しくいえば、この本質を糊塗するものでしかありえない。それは丁度癌細胞におかされて手術が必要な患者に対して風邪薬を与えるヤブ医者のごときものということができるであろう。同様に、慶応大学教授加藤寛氏が、「行政は非常事態でない限り、価格介入ではなく、企業の違法行為を取り締まりに全力を尽すべきだ」(一九七四年十二月二九日付東京新聞朝刊、「流通に監視の目を」参照)と述べる時、やはり患者「日本資本主義」の治療にあたる典型的なヤブ医者とも

なさざるをえないのである。

簡単な総括

以上、われわれは資本主義の生産に特有な過剰生産恐慌をいかに把握すべきかという問題意識のもとに、リカード、シスモンディおよびJ・ミルといったブルジョア経済学者の所説を批判的に検討し、ついで、科学的経済学の創始者といわれるマルクスおよびエンゲルスの説明を概観したわけである。これらの結果、われわれには次のことが明らかになった。

まず、前記ブルジョア経済学者における過剰生産したがって又恐慌に関する所説は、いずれも根本的欠陥をもっていることを否定しえないものである。第一に、リカードにおいては、彼の一般的過剰生産否定の説明は、ある場合には詭弁的であり、ある場合には相矛盾する説明をしているものである。第二に、シスモンディにおいては、リカードと異なり過剰生産恐慌の結果を見聞している彼は、この否定ではなく、この根拠を探り解決策を模索するのであるが、その説明は、根拠については一面的・皮相的であることをまぬがれず、解決策については空想的・反動的であるといわざるをえないのである。第三に、ミルにおいては、いわゆる「販売と購買の形而上学的均衡」という彼の基本的命題は、資本主義の生産を物々交換に解消してしまふものであり、したがって、時代錯誤のそしりをまぬがれないものである。かくて、彼等の所説がすべて歴史的発展によ

マルクス恐慌論研究序説(後編)

って破産を宣告され、同時に、科学的経済学によってその欠陥の根拠が解明されたことは、すでにみた通りである。彼等の欠陥の根拠を一言でいうならば、彼等がブルジョアの限界をこええなかったという点にある。与えられたブルジョア社会を永遠に存続する社会とみなし、ブルジョアの生産を最もすぐれた生産の在り方と断定する彼等のブルジョアの立場にこそ、その欠陥の根拠が存在するのである。恐慌はブルジョア的な生産と交換そのものから生ずるのであり、この生産と交換の存続をおびやかすものであるが、ブルジョアの視野に立つかぎり、このブルジョア的な生産と交換をおびやかす過剰生産恐慌はけっして説明されえないものである。

これに対して、マルクスの恐慌に対する考え方は、これらのブルジョア経済学者たちのそれとは根本的に異なるものである。彼は、まず、ブルジョア社会そのものを歴史的・過渡的・一時的な社会とみとめ、より高次な社会へ必然的に発展し移行せざるをえない社会と考える。そして、この移行のための主体的ならびに客観的諸条件は、このブルジョア社会そのものの中から生みだされざるをえず、かかる諸条件の成熟によってのみ新しいより発展した社会の実現が可能であると考えるのであり、このような観点において、過剰生産恐慌はきわめて重要視されていたのである。ブルジョア社会における機械制大工業による生産力の飛躍の上昇は、リカード等が考えていたように人々に富と福祉をもたらすといった簡単なものではなく、一方におけ

る少数者への巨大な富の蓄積と、他方における圧倒的多数の人々への貧困の蓄積といった形をとらざるをえないものであり、さらに又、周期的恐慌という形でブルジョアの所有関係とたえず衝突せざるをえないものである。したがって、かかる恐慌はブルジョア社会における生産力の上昇の結果として必然的で、不可避的な経済現象なのである。この恐慌の周期的襲来によって、ブルジョア社会の人々、とりわけ賃銀労働者階級Ⅱプロレタリアートは、失業等による困窮を通じて餓死寸前たる塗炭の苦しみを味わわされるのであるが、それがいかに厭わしく悲惨なものであろうと、資本主義的生産の下ではそれは決して避けて通ることのできない必然的な結果なのである。シスモンディは、ブルジョア社会をこのような悲惨な結果から回避するため、生産と消費が均衡をえていた中世に救いを求めるのであるが、これはいうまでもなく、歴史の車輪を逆転させようという反動的な試みにすぎない。マルクスはむしろ逆に、この恐慌を通して変革における諸条件の成熟を見いだすのであり、したがって、ブルジョア社会の発展において決定的に重要な意味をもつ経済現象としてこの恐慌をとらえていた、ということができるのである。